

佐竹先生を偲ぶ

田 島 義 博

3年少し前、ひょうたんから駒のような形で、私が経済学部長になった時、定年で学習院をお辞めになったばかりの佐竹先生から、励ましのお葉書を頂いた。思いもしなかった学部長だっただけに、抱負も方針も、それに自信も全くなくて、正直な話、途方にくれていた私には、佐竹先生のお葉書には、大へん勇気づけられた。その後、一度か二度、電話でお話をしたことがあったように記憶しているが、それ以後、私の方も多忙に紛れて失礼を重ねていた。

ところがこの4月のある日、突然、院長室から佐竹先生が悪いようだと言われ、すぐ島野先生にも内々にお知らせしておいた。何でも、気管支鏡検査の時に麻酔をかけられたのの後遺症で、微熱が抜けないまま、現在は呼吸が難しくなっているということであった。そんな経緯であるから、大事に至ることはなく、いずれ快癒されると考えていたが、その後すぐ先生の訃報に接することになってしまった。学習院ご在勤の頃から、ご病弱ではあったが、検査が契機で大事に至るとは、返す返すも残念に思えて仕方がない。

佐竹先生とは、学習院で25年間ご一緒させて頂いた。思えば長い年月である。私は昭和38年、経済学部創設のための要員の1人として、当時の政経学部に専任講師として採用されたが、私の専門は流通であり、先生の交通論とは接点が多いことから、何かと目をかけて頂いた。共通の知己も、学界には少なくなかった。先生のご趣味が写真であることは、学部内で知らない人はいないと思うが、旅行もお好きだったようである。先生とは二度、思いがけないところで、ばったりお会いしたことがある。一度は箱根仙石原の観光ホテルであった。私は疲れた時の静養や原稿書きに、このホテルを20年来利用していたが、ある日、ロビーで先生と全く偶然にお会いした。軽装で、例の如く、カメラを肩に下げておられたが、お聞きすると、先生もまた、このホテルを定宿にしておられるとのことであった。

もう一回は、ローマの中央駅前のホテルであった。交通関係の調査でお出でになっているとのことだったが、先生の学風の1つの特徴は実証性であって、おそらく、先生はそうにして、いろいろな地域の交通事情を、ご自身の足で歩いて調査されていたのだらうと思う。お互いグループ行動の身だったので、ゆっくりお茶を飲むという時間もなく、立ち話のままお別れしたが、先生とお別れする今、不思議にローマでの先生とのそんな別れ方が、私の思念の中に浮ぶ。どこかで先生とばったり会うことも、もうないのだなと考えると、改めて先生のご逝去が実感される。合掌。